【研究ノート】

山口県立山口博物館所蔵大坂城築城の残石について

荒　巻　直　大

A stone material at the time of Osaka-jo Castle construction possessed in Yamaguchi Prefectural Museum

Naohiro Aramaki

山口県立山口博物館研究報告

第43号（2017年３月）別刷

Reprinted from

BULLETIN OF THE YAMAGUCHI MUSEUM

No.43（March 2017）

山口県立山口博物館研究報告　第43号　75～80頁　2017年3月

【研究ノート】

山口県立山口博物館所蔵大坂城築城の残石について

荒巻　直大[1)]

A stone material at the time of Osaka-jo Castle construction possessed in Yamaguchi Prefectural Museum

Naohiro Aramaki

1　はじめに

当館前庭には前身である山口県立教育博物館時代に寄贈を受けた大坂城築城石材を屋外展示している。(写真１)

写真1

本資料はその伝来経緯として、毛利輝元が献じた豊臣氏時代大坂城石材の残石とされてきた。しかしながら、史料的知見やその採石場所である周南市大津島の石切丁場が徳川氏による大坂城の石切丁場であったことから長州藩初代藩主毛利秀就による徳川氏大坂城の石材説も以前からあった。なお、本資料が運ばれてきた大津島の石切丁場の遺跡遺構について学術的調査等はほとんどなされていない。

本報告では当館寄贈の経緯を示す史料を提示するとともに、極めて不十分な内容ではあるが、その現状を報告するとともにその考察を試みたい。なお、同資料の考古学的評価については、別稿を期したい。

2　伝来経緯について

当資料の当館への伝来経緯については、山口県立山口博物館の前身である山口縣立教育博物館時代(大正６年開館)の1930年(昭和５年)12月刊『大典記念　山口県立教育博物館　本館第14回報告』(以下、「報告30」とする)「大阪築城石材の寄贈」の項目に記載がある。以下その冒頭の一部を引用する。

写真2

都濃郡下松町矢島専平より大阪築城石材一個を寄贈せり。本品は天正十一年豊臣秀吉が大阪築城の際、毛利

1）山口県立山口博物館（考古）

輝元より領内都濃郡大津島の石材を献上して其の用に供せしことあり。当時大阪に運搬せし石材の残余品、大津島にありしを矢島家に譲り受けしもの二個あり。其の一個を本館に寄贈せしものなり。長さ十尺幅及び厚さ四尺量目一千八百貫目、長方形にして左側面に$\overline{\mathrm{O}}$の形を彫刻し一星石の名あり、七月一日午後一時山口駅に到着し一週間を費し本館に到着前庭に据付けた。

1930年(昭和５年)[1]７月１日、もともと周南市大津島[2]にあった大坂城石材を塩田大地主でもあった矢島専平氏[3]から豊臣秀吉築城の大坂城普請の石材として寄贈を受けた。「報告30」の巻首にはその際の写真も掲載しているので、あわせて示す。(写真２)同資料は山口線により山口駅まで運ばれた後、当館前庭に置かれた。縦306㎝横130㎝高さ120㎝で小口部に毛利氏の家紋「一文字に三つ星」を示す「$\overline{\mathrm{O}}$」が刻印されている。また、その内部は刳り抜かれている。矢島家私邸にあったときは真四角の石材であり、抜去されていなかったという。その理由は運搬の際に重量軽減のためと伝えられているが定かではない。[4]

また 「報告30」には、この寄贈経緯の由来を示す詩文 「一星石歌」(『省耕集』[5]所収、筆者は本城斐[6])が記載している。以下、この冒頭を引用する。

石者、在于大津洲、天正十一年、豊太閤築城於浪華、我　　天樹公亦助役、採石於此、其残余三十許今現存、各々有印記、冒一星以畫一、因曰一星石、今茲初夏仲四、　　公諸巡視諸島、便路往而観之、臣斐亦得従焉、慨然依蘇子瞻石鼓詩韻賦以献

維歳癸未月在丑、豊公下令戎国叟、急課築城浪華城、城楼跨雲鬼神走、当時我　　公与彼和、対軍歃血血在口、臨事濡滞是女兒、助役不肯落人後、秦鞭驅石石亦驚、混沌鑿竅未要九、千里輸致海路遥(以下後略)

とあり、石材は大津島にあり、豊臣秀吉の大坂城城普請に毛利輝元が助役した。石材残石が30ほど現存し、一星を刻印した所以から一星石という。1851年(嘉永４年)周防国徳山藩第９代藩主毛利元蕃[7]が領内の大津島を巡視し、この石材を実見したことを、その臣下である本城斐が宋の文豪・蘇軾の「石鼓歌」をふまえて七言古詩形式の詩文を製作している。

また、「報告30」には寄贈資料の由来を示すもう1つの詩文が記載されている。1893年(明治26年)９月下旬に大野雲潭[8]がしるした詩文「一星石記」である。以下その一部を引用する。

城壁千仞。峭聳雲際。是爲大阪石山城。天正十一年豊太閤之築斯城也。毛利輝元公輸巨石以助其役。石刻一星。一星毛利氏略章也。毛利氏出於平城天皇第三子阿保一品親王。以一品爲徽章。草書之則一画三星矣。一星乃省其二星。初輝元公採巨石於周防大津島。令石工刻之。其未輸者七。今尚在焉。係島民所共有。一星隠然存苔紋中。矢島君投金得其最大者二。(以下後略)

とあり、石材について豊臣大坂城築城の際に毛利輝元が城普請役の一人であり、毛利家家紋の由縁と大津島から大坂へ未輸送の石材が７個あり、うち２個を前述の矢島専平氏が資金を投じて大津島から矢島氏の私邸のある下松恋が浜へ運んだとしている。

「報告30」にある２つの詩文はともに毛利輝元の豊臣氏大坂城城普請の石材としている。これと同じく『都濃郡誌』[9]「大阪城の角石」の項にも「本村字十人墓に$\overline{\mathrm{O}}$の紋を彫刻せる大石三個あり。是は長州毛利藩主が豊臣秀吉石山城を築くに当りその角石に使用すべく献納せんとて採取したるものなり、と。最近大正十一年四月山中より発掘せるもの、寸法重量等左の如し　縦横各三尺　長さ八尺　約八十四切　重量約一千六百貫」とあり、1922年(大正11年)４月には埋没していた石材を掘り出したとある。また、『防長地名淵鑑』[10]「大津島」の項にも「大津島

村字十人墓に毛利氏船印一星の紋章を刻せる切石数十箇、或は土中に埋没し、或は露出す。天正十一年羽柴秀吉大坂城を築く。毛利輝元役を助け、石材を此の島に採る。是れ其残余なり」とあり、いずれも豊臣氏大坂城城普請の石材を毛利輝元が献納したとある。

以上、「報告30」にある「一星石歌」、「一星石記」、『都濃郡誌』及び『防長地名淵鑑』の記載は石材の個数や大きさには差違が認められるものの、いずれも豊臣氏大坂城城普請に毛利輝元が輸送献上した石材とあるとしている。また、少なくとも明治の中頃までには1893年(明治26年)までに石材２個が周南市大津島から下松恋が浜に運ばれ、うち1個が1930年(昭和５年)に当館へ寄贈を受けている。

現在確認できる残石は６個で、当館前庭、周南市文化会館[11]にそれぞれ１個が移され、大津島に４個が残されている。寸法はおおよそ２つの規格が認められ、材質はいずれも花崗岩で、大津島にある埋没した１個を除き、「$\overline{\mathrm{O}}$」の刻印が見られる。

２　毛利氏の大坂城城普請について

大坂城築城は豊臣秀吉が天下統一の拠点として、1583年(天正11年)に築城を開始し、秀吉没後の1600年(慶長５年)に完成をみる。1614年・1615年(慶長19・20年)の大坂冬・夏の陣で焼失後、徳川氏によって西国支配の拠点として大坂城が再築される。

豊臣氏、徳川氏による大坂城城普へ毛利氏の普請参加について、先行研究から整理してみたい。ここでは渡辺武『図説　再見大阪城』(財団法人　大阪都市協会1983)、内田九州男「徳川期大坂城再築工事の経過について」、中村博司「大坂城再築の経過と普請大名の編成」(『ヒストリア別冊』大阪歴史学会2009)、中村博司「慶長三～五年の大坂城普請について―「三之丸築造」をめぐる諸問題―徳川幕府の大坂城再築」があるが、本報告ではこれら先行研究に多く依拠していることをあらかじめ明記しておきたい。

豊臣秀吉の大坂城築城は1583年(天正11年)旧暦９月１日をもって本格的に築城を着工した。途中、朝鮮出兵等のブランクを挟んで前後二期に分けると、本丸・二之丸普請のおこなわれた天正11年９月から同16年３月までの四年半を前期とし、惣構・慶長の普請が行われた文禄三年二月から慶長五年七月までの六年半を後期としている。更に前期を２つ、後期を２つに分け、４段階に分けると、第１期が1583年(天正11年)９月から1585年(天正13年)４月頃まで(本丸の石垣普請、天守の完成(大天守の竣工は天正13年４月頃)、第2期が1586年(天正14年)正月頃から天正16年３月末頃まで(二の丸の築造)、第３期が1594年(文禄３年)正月から1596年(文禄５年)頃まで(南の空堀をはじめ惣構の堀築造。)、第４期が1598年(慶長3年)６月から1600年(慶長五年)7月(馬出し曲輪の普請)とされる。

毛利輝元の城普請への参加はその第4期にみられる。1599年(慶長4年)３月11日付、毛利輝元黒印状、椙杜元縁・天野元信宛には大坂普請に輝元から家中から「大坂御普請衆」として安国寺恵瓊・吉川広家の組も含む八組、計10,717人の動員が指示されていることからその参加がうかがえる。[12]また、1599年(慶長４年)７月２日付、毛利輝元掟書、堅田元慶宛にも分国之者共近年公役に相疲候者掟之事として「公役」(大坂城普請と推定する)から疲弊する家臣の者の多いことから掟を定める経緯がうかがえる。

また、1600年(慶長５年)７月23日付、毛利輝元書状桂元方宛を以下、引用する。

其元之事佐石(佐世元嘉)相談、万事不可有由断事肝心迄候、此表
之儀諸人質等取堅、其外城之普請等無緩候、於趣者佐世
所江申聞候間可申候、かしく
七月廿三日(慶長五カ)　御判(輝元公)
桂五郎左(元方)

同じく、同日付、毛利輝元定書桂元方宛にも、

桂五郎左衛門尉組
一九千七百拾壹石
一人數百九十四人　但百石ニ弐人充
一石舟三艘五十石　但三千石ニ壹艘充
一人數着到來月十五日を限候事
一舟上候儀者來月晦日を限候事
以上
七月廿三日(慶長五カ)　御印形(輝元公)

とあり、1600年(慶長５年)６月、徳川家康が大坂を去った後、反徳川派の総大将格として７月16日に大坂に上り、大坂城西の丸に入り、大坂方の指揮をとる。大坂方は人質を確保し、城の普請をゆるぎなく行われていることを報じているが、同日付の人員動員や「石舟」輸送が大坂城普請とするかは判然としない。

1614年・1615年(慶長19・20年)の大坂冬・夏の陣で豊臣氏大坂城が焼失後、江戸幕府が西国支配の拠点として大坂城を再築する。徳川氏による大坂城再築は、櫓・門の構築工事と石垣・堀の構築工事とに分かれ、石垣・堀構築については主に北国・西国の諸大名六十四家に城普請として実施された。普請は1620年(元和６年)６月からの第一期普請その補修、1624年(元和10年・寛永元年)からの第二期普請とその補修、1628年(寛永５年)の第３期普請とその補修まで、３期に分かれて約10余年間にわたって完成した。

毛利秀就(萩本藩)の大坂城普請については、第１期普請(元和６年～)に第３組、第２期普請(寛永元年・２年)に第４組、第３期(寛永５年)に第４組として参加している。また、大津島の石材については、第二期の普請について記録が残されている。(『山口県史』史料編近世１上(1999年)毛利四代実録　大記録１・2・3)

(寛永元年10月)

同日(二日)是ヨリ先キ、岡善兵衛・二階惣兵衛へ、此ノ度朝鮮人来朝ニ付、御領内通行スヘキナレハ、官人漕船仕出ノ義ヲ命セラル、且ツ大坂御普請再ヒ御助役ニ付、大津島ニ有之石九十八、三田尻御船手中トシテ当年中ヲ限リ彼地ニ運送スヘキ旨ヲ仰セ聞サル、依ツテ今日乃美兵部・沓屋信濃守・粟屋太郎右衛門・村上助右衛門・村上掃部等ヨリ益田元祥・清水景治へ御座嘉兵衛・乃美善左衛門ヲ以テ、大坂御普請石年内ヲ限リ運送ノ義、加子等累年ノ課役ニ困窮シ、及ヒ頃風波ノ難アレハ、来春ヲ期シ差シ上スヘキ謂ヲ相議ス

とあり、大津島から石垣用石材として大坂へ運搬されたことが、明らかになっている。

3　検討課題

以上、当館所蔵大坂城築城の残石について、その史料から毛利秀就による徳川氏大坂城普請の石材と結論付けるのが妥当だとしておきたい。確かに史料的知見からは毛利輝元が豊臣氏大坂城普請に参加したことは傍証できるが、その際、大津島から石材を運搬したかは確定できない。また、徳川氏大坂城普請に使用された周南市大津島石材残石がなぜ毛利輝元による豊臣氏大坂城普請石材残石と伝来となったことについても、判然としない。また、本稿では触れていないが、石材の規格や石材の刻印については未考察である。先行研究では、家紋を示す刻印のある石材は徳川氏大坂城石垣からは見つかっているが、豊臣氏大坂城石垣からは現在のところ見つかっていない。このことからも本資料については徳川氏大坂城普請石材の傍証の1つとなりうるとするが、今後の検討課題としたい。

注

（1）昭和天皇即位記念事業として整備が進められた大阪天守閣再建工事は1930年（昭和5年）に始まり、翌年1931年（昭和6年）に完成した。

（2）大津島は山口県周南市に属し、周南市から南西10㎞の徳山湾内に、湾の西を縁取るように浮かんでいる。周囲20.9㎞、面積4.76㎢、南北約７㎞、東西約0.5 ～ 1 ㎞の細長い沈水島で平地に乏しい。石切丁場は島の北端にあたる、近江（ちかえ）・瀬戸浜（せとはま）地区周辺と推定される。地質としては大部分が三郡変成岩で占められており、北東岸に黒雲母花崗岩が見られる。
大津島の地質は、大半が三郡変成岩類黒色片岩及び、緑色片岩で占められており、石材加工業に用いられる黒雲母花崗岩は、大津島の北東岸のみにみられる。

（3）衆議院議員、正六位勲三等功五級陸軍歩兵大尉（1876年～1955年）

（4）［笹尾83］P49

（5）毛利元蕃の詩文集。元蕃は、1850年（嘉永３年）、風水害に際し、封内の諸村を巡視して、病気の庶民を慰め、老人をいたわり、孝子や篤農家を賞した。本書はこの時の詩文を集めて出版したものである。

（6）本城斐　変名：江村清、本城清、本城仲章、本城素堂　主な役職：興譲館訓導役、代官役江戸時代末期の徳山藩士。徳山七士の一人。徳山藩士･江村忠韶の次男。

（7）毛利元蕃（1816-1884）周防国徳山藩第９代藩主。毛利広鎮（ひろしげ）の七男。洋学や国学を奨励し、文治政策を進めた。幕末に宗家の萩藩に協力し、毛利敬親の補佐を務め、幕長戦争などに出兵した。1869年には版籍奉還により徳山知藩事となった。

（8）大野雲譚：名は太衛、字は子醇（しじゅん）、徳山藩藩士、初め其の郷の飯田竹塢に従学し明治に入り上京して中村敬宇（中村正直）の同人社に学び経史に通じ詩文を能くし『近史偶論』其の他の著述あり、明治年間没す、享年知られず（吉田祥朔『近世防長人名辞典　増補』1976）

（9）『防長地名淵監』（御薗生翁甫　防長倶楽部 1931）

（10）『都濃郡誌』（山口県都濃郡役所1924）

（11）大津島倉の窪の船着場より1982年（昭和57年）に移す。

（12）［中村06］P259

主要参考文献

笹尾誠　「徳山湾内の大阪城の残石」『徳山地方郷土史研究』 第４号（徳山地方郷土史研究会 1983）
川上浩史「山口県の石切丁場」（『ヒストリア別冊』大阪歴史学会2009）
内田九州男 「徳川期大坂城再築工事の経過について」（日本城郭史研究叢書　第8巻 『大坂城の諸研究』名著出版1982　）
中村博司「大阪城再築の経過と普請参加大名の編成」（『ヒストリア別冊』　大阪歴史学会2009）
中村博司「慶長三～五年の大坂城普請について―「三之丸築造」をめぐる諸問題―徳川幕府の大坂城再築」『ヒストリア198号』2006
藤井重夫「大坂城石垣符号について」（日本城郭史研究叢書　第8巻 『大坂城の諸研究』 名著出版1982　）